



2023年11月30日発行

巻頭メッセージ

「調べることの楽しさ」と「わかることの喜び」を味わおう

一冊の本を紹介するところから始めます。その本は近代食文化研究会『お好み焼きの物語』（新紀元社、2019年）です。ここ半年ほどの間に、半分は授業の教材探しを目的に、半分は単純に興味を引かれて読んだ何冊かの食べ物に関する本の一冊です。この本ではお好み焼きの発祥の時期や場所を探っています。お好み焼きはたこ焼きと並んで大阪の粉もん文化の代表ですから、大阪発祥だと思っている人がいるでしょうし、広島風お好み焼きも有名ですから広島が発祥という説もあります。ところが、この本によると現在につながるお好み焼きは、明治末に東京の浅草周辺で子ども向けの屋台料理から誕生したということです。

ここで取り上げたいのは、著者が（著者は近代食文化研究会ですが個人の方です）この結論にたどり着くまでのプロセスです。企業が開発・販売した加工食品の場合は、その誕生の時期を企業の公式の記録（社史やHP）によって確認できますが、お好み焼きのような外食発祥の食べ物には公式の記録がなく、食べ歩きの本やエッセイ、自伝、雑誌・新聞記事など様々な資料を探して、調べるが必要になります。著者は5年をかけて2,500冊以上の本に加えて多くの雑誌・新聞記事を参照したそうですし、本書には参考文献・資料が320も掲載されています。まさに執念の調査と言えます。

では、著者がこの調査にかけた執念（情熱？）を何が支えたのでしょうか。私は「調べることの楽しさ」と「わかることの喜び」だと思います。当初はどこから手をつけて良いのか、とまどいがあったでしょうが、調べていくうちにいろいろなことがわかって楽しくなり、やがて漠然とした仮説が裏づけられたり、思いもかけない事実を発見したりすることに喜びを感じたことが、著者の執念（情熱？）を持続させたのでしょう。

また、本書から感じたのは多くの資料を比較して考えることの大切さです。著者はこれまでの資料に書かれていることを、他の資料と比較することによって一つ一つ確かめていま

す。その結果、通説（俗説）の誤りを発見したり、誤っていると評価されていた記述が正しかったと再評価したりしています。

4年生は卒業研究の追い込みの時期ですし、3年生もゼミが本格化していますので、いろいろなことを調べているでしょう。1・2年生も専門の勉強のなかで調べる機会が増えます。大学生活を通じて、ぜひ「調べることの楽しさ」とその結果「わかることの喜び」を味わって欲しいと思います。

（教員・小野雅之）



前期授業を振り返る

基礎経済学

この科目は専門必須として、これから専門科目を学習するための基礎系として位置づけています。したがって、ミクロ経済学とマクロ経済学を前段階として、経済入門のような授業内容になり、経済学という学問の基礎原理をしっかり養うことが主な目的であります。たとえば、需要と供給、消費経済、生産経済、生産物市場と生産要素市場、ゲーム理論と情報の経済などをミクロ的な視点から、国民所得、総需要と総供給、貨幣と金融、失業とインフレーション、経済政策などをマクロ的な視点で学んでいます。とくに、経済の主要指標、すなわち東証株価指数、日経平均株価、そして米ドルとユーロに対する日本円の為替レートを授業毎に調べ、所定の様式に記入し、15百分のデータをもって相関分析を行い、相関関係を究明することも行いました。

担当教員としては、はじめて経済学を学習する受講生に対し、とてもやさしく授業を進めたと思いますが、受講生がしっかり経済学の基本原理を理解し、身についたかは大きな疑問です。

（教員：成者政）



食料・農業経済学

この授業では、就活や卒業研究などの現地調査で、企業や団体、行政機関を訪問する際に、担当者の方々とコミュニケーションを取る上で必要な食料・農業経済学に関する基礎知

識を身につけることに主眼を置いています。そのため、授業のポイントを復習・確認する「ふりかえりシート」の提出を課題にしています。授業資料に読めばすべて正解となるようにシートの正誤問題を作成していますが、今年度は正答率が低く、未提出も目立ちました。知識がすべてではありませんが、やはり食農ビジネス学科の学生として最低限のことは知っておいてほしいと思います。

(教員・吉井邦恒)

農業開発論

農業開発論のねらいは、「農業開発の理論と系譜および世界各地の農業と生態環境との関わりを理解したうえで、農業開発をめぐる学術研究や社会実践の事例から問題解決や未来社会の形成に果たす農業の役割と可能性を考える」こと。私が担当している1年次の必修科目「アグロ・エコロジー論」と2年次の必修科目「比較農業論」を踏まえたうえで、村落開発や地域起こしについて考える授業です。選択科目なので嫌々受講しなくてもいい。なので、シラバスに沿いながらも、かなり実験的な内容にしています。授業の1/3は、アジアやアフリカでの村落開発の事例の紹介、もう1/3は、PDM（プロジェクト・デザイン・マトリックス）という村落開発の設計図のようなものの解説、最後の1/3は「仮想的地域の概要づくりと地域開発事業のアイデア出し」。最後が、実は難物。受講者がグループをつくり、前者では「想像上の地域を設定し、そこがどういうところなのかを自由に描き、文章で表現する」こと、後者では「その仮想地域の問題の解消や課題の解決に資する事業案をつくり、それをプレゼンする」ことをします。『自分は、知識量も発想力も構想力も文章力も表現力もまだまだ足りないな』と思ってもらうことが一番の目的。地域貢献とか困っている人びとを助けたいということを目にしますが、そんなことを言うには本当は10年早い。自分に力を付けないと絵に描いた餅。昔の偉い人が言ったという「無知の知」や「汝自身を知れ」を実感してほしいなと思っています。果たして、受講生諸君はそこまで思い至ったでしょうか？

(教員・田中樹)

Rice cake



Utopia

後期に向けて

1年生へ：大人への道

1年生の皆さん。大学に入って約半年が過ぎました。毎日、どのように過ごしていますか？授業や課題が大変？アルバイト三昧？なんやかんやと充実してる？大学生になり、子どもでもなく、大人でもなく、なんだかどこに軸足を置いたらいいのかなと思っている人も多いかもしれません。

でも、大学生はもう立派な「大人」です。高校生までと違って、アルバイトや実習などを通じて、社会と接することも各段に増えるでしょう。「大人」としてのふるまいを今のうちから意識して身につけましょう。格好の練習場所は大学の中です。教員や事務員と話すときに、どのように話していますか？私は時々、授業やゼミなどのフォーマルな場で、学生が自分のことを指すときに、「私は」などではなく「〇〇は」と自分の名前をいう学生がいてびっくりします（私の名前前で例えると、「久実～、〇〇だと思っんです～」みたいな感じ）。教員とのやり取りも今はメールではなくチャットで行う機会も増えました。ですが、友達同士のラインのやり取りではなく、学校というフォーマルな場でのチャットの場合は、やはりそれなりの礼儀が必要ではないかと思います。突然、学年や名前も書かずに、「今日はお休みします」だけ来るチャットの何と多いこと！どの授業のことを言っているのかもわかりません。

うるさいこというやつだな、なんて思わずに、そうかそんなものなのか、だったら社会人として社会に出る前に大学でちょっと練習しておこう、と前向きにとらえてくれたら嬉しいです。大人への道に向っていく1年生の皆さんへのちょっとしたアドバイスでした。

(教員・副島久実)

2年生へ：就職活動を考える

これまでの長年にわたるゼミ生の就職活動を私なりに振り返ると、やはりスタートダッシュよく就活を始めた学生は早く希望する企業の内定をとっていたと思う。企業の新規学卒者の採用にはいくつかの「山」があり、企業は採用初期に人数的に一番多く採用して当該期の採用計画達成の目途をつけ、その後の採用は調整期に入る。だから、早く就活を始めた学生ほど企業が採用したいとする大きな「山」に遭遇し、内定率が高かつその時期も当然早くなる。就活はスタートダッシュが大事だと思う。

ところで、就活において皆さんには「自分はどんな仕事に向いているのか」を自問自答する時が必ず訪れるだろう。しかし、きちんと回答できる人は少人数で、大半は「よくわからない」と答えるはずである。しかし、私は安心していいといたい。「あなたがどんな仕事に自分が向いているのか」、急に答えろといわれても、やはり「わからないものはわからない」のではないか。

「安心していい」という根拠は以下のとおり。あなたが新入社員として会社に入って、上司から指示される業務は恐らく「誰でもできること」だろう。そして、その誰でもできる仕事を繰り返すなかで、ようやく上司の信頼を得て、「誰にもできない仕事」を託される、これが現実の社会人がスキルアップしていくプロセスである。ここで初めて自分の才能や特性を花開かせるチャンスがあなたに到来する。

つまり、就職を考える上で、最も重要なことは、「自分がどんな仕事に向いているのか」ではなく、あなたは「誰でもできることをきちんとこなすこと」ができるかどうかを自問することであり、社会人としての学力やコミュニケーション力などの「人間力」が身についているか、にある。恐らく、会社の人事担当者が面接時にチェックしているのもここだろう。

この点で、究極の就職活動とは、毎日コツコツと授業の予習、復習に精を出し自分の学力を蓄積し、時に友人と語らうといった日常の学生生活そのものを通じて、誰にでもできることをきっちりとこなせられる基礎を固めることなのだ。

(教員・濱田英嗣)



3年生へ：好奇心のアンテナを張り、研究の扉を開けよう！

高校時代、理科系人間だったけれども室内での実験はあまり好きではない…、そんな私にとって好都合であった農業経済学分野（理科系入試で受験できて、大学に入ってから社会的なことが学べる）であったが、深い問題意識もないまま何となく入学後2年間を費やした（サークル活動は熱心であったが…）。研究というか学ぶことの面白さを感じ始めたのは、3年生になってからのことである。専門的な授業が増え始め（昔は、1～2年生ではほとんど専門の授業がなかった）、農業や食料問題を社会科学的に考えることの面白さ、答えが一つではなく、いろいろな見方や考え方ができる問いに対して、指導教員にヒントをもらいながら、時にはゼミの仲間と意見交換しながら検証していく。こうした大学らしい

学びを実感できたのが3年生後期の頃だったと記憶している。もちろん就活も大事だけれども、せっかく大学に入ったのだから、要領よく単位を取って卒業するだけではもったいない。好奇心というアンテナをあちこちに張り巡らしながら、研究の扉を開けて、学びの面白さを少しでも体感してほしいと願っている。それはきっと、社会に出ても役立ちますよ。

(教員・北川太一)

4年生へ：卒論の完成に向けて

4年生の皆さん。卒論の進捗状況はいかがでしょう？提出締切まで2ヶ月を切りましたが、最後まで良い卒論を仕上げるための努力をして欲しいと思います。卒論は、自分にとって唯一無二の作品です。優れた内容の卒論かどうかというも大事ですが、どれだけ努力したか？どれだけ工夫したか？どれだけ考えたか？ということも、自分の作品としての卒論の重要な意義です。

また、卒論の作成は、企画・調査・分析・考察・執筆といったプロセスを自分一人で行うので、卒論を完成させることで高い経験値を得ることが出来ると考えられます。ただし、どれだけ自分で考えて、どれだけ努力したかが、その経験値の高さを左右すると思います。

卒論のラストスパートに向けて、今一度、自分がどれだけ真剣に卒論に向きあっているかを確認し、より良い作品になるように努力してください。

(教員・浦出俊和)



ゼミ活動短信

持続型フードシステム研究室（谷口ゼミ）

昨年に引き続き、谷口ゼミでは年内にマルシェに出店し、枚方市穂谷地域で育てられた有機野菜の販売を行う予定です。目標とする売上額を達成できるよう、前期はマーケティングのテキストを用いて販売戦略の立て方に関する知識を養いました。また、5月からローテーションを組んで穂谷地域での農作業や山林の管理作業のお手伝いを行い、野菜の育て方や農家さんの想いなど、販売物にまつわる知識やストーリーについて五感を通して学んでいます。加えて、今年は販売のお手

伝いも実施し、農家さんから接客の作法や商品の魅力の伝え方についても学んでいます。出店日は11月18日(土)、場所は枚方市駅高架下と決まりました。ぜひ私たちのブースへ遊びに来てください。

(教員・谷口葉子)

食農農共生研究室(北川ゼミ)

「食と農を繋ぐ協同組合の役割」をテーマに、非営利協同論(3年・選択)の授業とも連動させながら、農協や生協だけではなく、漁協や森林組合、金融(信用金庫や労働金庫)や共済、さらには労働者協同組合(ワーカーズ)やボランティア組織など、さまざまな協同組合について学び、実際の現場を訪れています。「聴く力、問う力を育む」を研究室のテーマとしながら、挨拶や時間管理など礼を重んじ、学ぶときは学ぶ、楽しむときは楽しむといったメリハリのついた研究室活動をめざしています。ゼミ活動の様子は、大学のHPに、たま〜にアップしているので見てください^^。

(教員・北川太一)



【穂谷地域での里山保全活動を主催するパナソニックエコリレージャパンおよびボランティアの方々と】

食品流通研究室(戴ゼミ)

食通研の卒業研究では、4月の初めに、卒論完成を目標とした大まかな作業工程表(スケジュール)を提示しています。限られたスケジュールの中で、いかに自分の研究テーマに沿って計画を立ててさらに実行に移せるかは、個々の4年生に委ねられています。週に1.5コマの時間を使ってゼミを行っていますが、指導教員はあくまでも卒論の進捗確認や、学生による提案のあった内容に対してのみ助言することに留まっております。具体的な提案や質疑がない場合は、各々の作業時間に当てています。

一方、3年生のゼミでは、文献研究を中心に取り組んでいます。後期の前半では、加工・業務用青果物の流通やソバの流通について、専門書各章を分担して読み、レジュメやスライドをもって発表し、ディスカッションを行いました。後半はディベートを行う予定です。

(教員・戴容秦思)



【宿泊ゼミ：コープこうべ協同組合史料館にて】

食品産業研究室(濱田ゼミ)

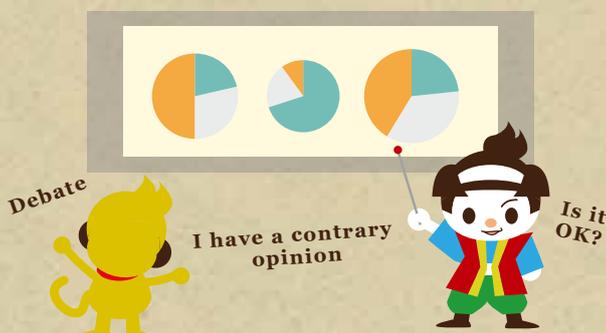
私たちのゼミでは交流会(ゼミコンパ)を行いました。それぞれの就活状況や卒論の作成状況についてみんなで話し合い、共有しました。やはりお酒が入り、普段見ることができないゼミ生それぞれの一面を知って、より仲が深まったと思います。大学生活が残り約半年間と短くなってきましたが、これからもゼミの交流会などの活動を中心にみんなで協力し、卒論作成に取り組んでいきたいと思っています。

(4年生・小山大輝)



食品・農業市場研究室(小野ゼミ)

小野ゼミでは、卒業研究を進めるために4月から毎週2コマ文の時間をとって、4年生の発表を中心にゼミを行っています。4年生は、切り花輸出の拡大要因と課題、



関東圏での「京のブランド野菜」販路拡大の課題、ドラッグストアにおける生鮮食品販売の拡大要因、コンビニの本部・ベンダー関係の比較、健康食品市場の動向と製造企業の事業展開、をテーマに卒業研究に取り組んでいます。いずれも難しい課題ですが、頑張っ

(教員・小野雅之)

農業経済学研究室 (成ゼミ)

専門ゼミは、英文のテキストを用いて経済学の基礎理論と手法の学習を行いました。それにより、受講生は経済学専門英語に慣れる機会にもなりました。それほど難しい文書ではありませんでしたが、専門語彙の日本語への訳し方に戸惑ったり、可笑しい日本語になったりもしていました。しかし、回を重ねることに専門英語に慣れていく姿を確認することができました。

後期には、卒業論文の作成を念頭に入れ、興味あるテーマについてグループワークとプレゼンテーションを行っています。なお、ゼミ合宿(兵庫県)も行う予定です、話し合いを始めています。

(教員・成着政)

農業経営学研究室 (柳村ゼミ)

3年生がいないので、今年は4年生だけで卒業研究を軸とするゼミ活動を行っています。昨年実施した京都府八幡市と綾部市の調査を踏まえて、それぞれの研究テーマにしたがって調査を進めています。関連する部分があるので、複数名で調査には出かけることの方が多いです。調査→とりまとめ→ゼミでの発表を繰り返すという地味な作業を続けています。これまでの調査は日帰りで大学の近くに出向いていましたが、10月以降は少し遠方に足を延ばす予定です。

(教員・柳村俊介)

農水産物・食品マーケティング研究室 (副島ゼミ)

夏季休業中に北海道へゼミ合宿に行ってきました！初日は北海道大学の先生とJICAの皆さんと一緒に東しゃこたん漁協さんのセリ、登醸造さんの蒸留所を見学させていただきました。普段は見れないセリの様子、ワイン用のぶどう畑や蒸留タンクなどにみんな大興奮でした！(試飲で頂いたワイン最高でした(^▽^))

2日目は農園レストランの花茶さんにお邪魔させていただきました。創業者の小栗さんは、「農家に嫁いだが経済的に自

立したい」という思いから起業され、現在では観光地の1つとして地域の活性化にも大きく貢献されています。

そして、合宿後はゼミ生だけで札幌、千歳、小樽に行き、絶景や夜景、温泉やサウナ、ジングスカンやお寿司を堪能しました！！

(3年生・副島ゼミ生一同)



【ゼミ合宿での一コマ】

食農教育研究室 (中塚ゼミ)

8月末と9月はじめに、3回生と4回生合同で、京都府和東町でオーガニックのお茶を生産・加工されている圓通(中井章洋さん&章人さん父子)に2回にわたって援農ボランティアに行っていました。山の頂上にある茶畑までの登山は後日、筋肉痛に悩まされるほどの体力勝負でした。茶園の除草や土の掘り起こしでは、いい汗をかきました。また、「赤ちゃん番茶」の袋詰め体験、ランチタイムにはみんなで手摘みした秋のお茶の新芽を天ぷらにして、茶そばと一緒に舌鼓をうつなど、農と食を満喫しました。余った茶葉を持ち帰り、1日発酵させて、紅茶づくりにも挑戦しました。

(教員・中塚華奈)



【京都府和東町圓通の有機茶畑にて】

食料・農業政策学研究室（吉井ゼミ）

当ゼミでは、毎回ブリーフィングと文献輪読を行います。ブリーフィングでは、自らが選んだテーマを5分程度で報告します。ジャンルは自由で、薬草栽培、競馬と農業、子ブタとカフェ、カエルと生態系、水族館、イングリッシュ・ブルドッグ、地名に秘められた意味、お酒、鳩、海外の文化、断捨離、線香花火等、中には授業時間なのに(?)というテーマもありますが、それぞれに工夫されたスライドを見ながら、楽しく聞いています。

文献輪読では、前期後半に「ビジネス・エコノミクス」（伊藤元重著、私の所属していたゼミの先輩です）を読みました。平易な文書と豊富な事例で、経済学が現実のビジネスにどのように応用されているのかについて、分かりやすく書かれています。ただし、544ページという分厚い本で、各自の割当が平均で40ページ以上となったので、苦戦した人もいたようです。

学外活動については、ゼミ生の都合が合わず夏休みは行事なしとなりましたが、ゼミ長を中心に、春休みに東京でゼミ研修を行うべく企画してもらっています。

（教員・吉井邦恒）

環境農学研究室

毎週のゼミ以外の活動は、滋賀県米原市の山間地域にある甲津原地区での援農活動。5月中旬に田植えの手伝いと水田周りの獣害除けの電気柵の設置、6月下旬に梅の実の収穫と梅干しの仕込み、7月中旬にソバ畑周りの電気柵の設置。いずれも1泊2日。汗をかいてくたくたになった感覚、ふと聞こえる溪流の音や吹き渡る風の涼しさ、ご飯の美味しさ、土地の人との語らい、自然や農業への知識がないことに気付き愕然とすること、遠くに聞こえるシカの鳴き声、あぜ道のシマヘビを狩って空に舞い上がるトンビ、踏みつけた草の青い匂い。大学で学ぶ知識は、人びとの暮らしの風景のなかのほんの一部。ゼミ生らがそんなことに気が付いたかどうかは知らないけど。大学での教育は、物事を教えるのではなく、学びの環境を用意するところに本質があると思います。ゼミ生が、大学を卒業してからいつか気付いてくれたら嬉しいなあ。

（教員・田中樹）



【獣害除けの柵の設置のお手伝い】

地域マネジメント研究室

「長野県飯田市での体験ゼミ合宿一」

今年も8月末に長野県飯田市でゼミ合宿を行ってきました。今年も、化石燃料ゼロハウスの「風の学舎」で、テレビ、エアコンの無い2泊3日の合宿でした。テレビやエアコンの無くて大丈夫かな?と少し心配でしたが、見晴らしの良いウッドデッキでBBQをして、夜遅くまでワイワイと騒いだり、炎天下での農作業体験をしたり、絶景の天竜峡に架かる大橋を歩いて渡るなど、盛りだくさんの体験で、充実したゼミ合宿となりました。

特に、蕎麦打ち体験は、全員が初体験で、楽しみながらも、今回のゼミ合宿で全員がもっとも真剣に取り組んだのではないのでしょうか。蕎麦打ちがこんなにも難しいということを知り得たのは、本当に貴重な体験となりました。蕎麦は本当に奥が深い!

（教員・浦出）



【ソバ打ち】

大学から、マチへ、ムラへ

西インド洋の島

この夏（2023年8月）、東アフリカ・タンザニアの島嶼部ザンジバルに行ってきました。昨年までは、コロナ禍の影響で、PCR検査の陰性証明書がないと帰国できないなど面倒な制約がありましたが、今年から以前と同じように渡航できるようになりました。とはいえ、世界的な旅行ブームで航空券が高い状態が続いています。安めのチケットを探した結果、関空ークアラルンプール（マレーシア）ードーハ（カタール）ーザンジバルという気の遠くなるような回り道をして、ザンジバルにたどり着きました。

インド洋西部に浮かぶこの島は、かつては「スパイスの島」と呼ばれ、クローブ（丁子）の世界的産地でした。いまでも世界有数の生産量を誇っているものの、クローブ樹の更新（若返り）の遅れや労力不足などにより少しずつ衰退しています。貧困や過疎高齢化が進む中、域内経済の不振だけではなく、陸域・沿岸域生態系の劣化も目に付くようになってきました。

このような状況を受けて、屋敷林や樹園地でのスパイス作物（バニラ、カルダモン、シナモン、コショウ、クローブ、ナツメグなど）の栽培と加工、省力的な小家畜（ヤギやホロホロ鳥）の飼養などを通じて、零細農民層（高齢者や寡婦、障がい者など社会的弱者層を含む）の暮らしの向上と陸域・沿岸域生態系の保全（赤土流出の抑制や地下水の涵養など）を実現する仕組みの実証試験や普及に取り組んでいます。こう書くと、堅苦しい感じがするかも知れませんが、実際には、木陰で潮風に吹かれながら島の人びとと雑談したり仕事を早仕舞いして海辺の宿でのんびりすることも多いです。

（教員・田中樹）



【なかなか見ることのできないクローブの花】

“観る将”からの学び

私の趣味は三つある。一つは鉄道。いわゆる「乗り鉄」だが、最近は駅舎やローカル線の終着駅などをめぐっている。二つ目は、あるシンガーソングライターの応援。ファンというよりも信者に近い（！）。そして三つ目は、将棋観戦。指すのではなく、いわゆる“観る将”である。

ABEMAチャンネルで観戦することが多いが、先日、念願かなって、将棋のタイトル戦の大盤解説会に参加することができた。里見香奈女流五冠と西山朋佳女流三冠（タイトル数は執筆時の黄金カードである。礼に始まり礼に終わる所作、艶やかな和服と対局中の両者の真剣な眼差し、美味しそうな昼食の紹介（笑）、大盤解説に登場する棋士たちのユニークな話術、そして対局後は、両者和我やかな雰囲気で行われる感想戦（さぞかし、負けた方は内心悔しいと思うけど）。見どころ、見習うべきところが実に多い。「指した手が最善手」という羽生善治さんの言葉がある。くよくよと済んだことをふり返らず、今置かれている場で最善を尽くす。私は、そんな意味に捉えている。

（教員・北川太一）



【日本将棋連盟の売店で購入した羽生さん直筆の扇子】

Do your best

王将



歩

「五十の手習い～ワカメ養殖を学んできました!」

学生時代から有機 JAS の研究を続けていますが、2022 年 12 月に藻類の有機 JAS 基準ができた時、頭に不安がよぎりました。オーガニックでも自分の専門分野外は、わからないことが沢山。ワタクシはワカメやコンブの養殖の実態を全く知らずに、大人になってしまったのです。

そこで、副島久実先生にお願いし、徳島県小松島市和田島のカネタ水産さんに連れて行っていただきました。

10 時に到着した時には早朝 5 時から収穫された約 1 トンのワカメを海水でボイル→冷却→塩蔵されている作業の真っ最中でした。褐色のワカメがボイルした瞬間に鮮やかなグリーンに変わる光景は、まるで魔法のようでした。ワカメ養殖についてみっちり教えていただき、メカブや遊走子とは何なのか、オーガニックワカメと慣行ワカメがどう違うのか、ようやく自分の言葉で話せるようになりました。

いくつになっても知らないことを学ぶということは、やっぱり面白いなあ、と実感しました。

(教員・中塚華奈)



【徳島県小松島市和田島のカネタ水産さんにて】

学生ひろば

協力して勝利を掴め!～食ビゼミ対抗スポーツ交流戦～

今年の 5 月 27 日に、1 年次必修科目「基礎ゼミナール」の一環として、ゼミ対抗スポーツ大会が開催されました。大会では、多人多脚走とソフトバレーボールの 2 つの項目が行われ、食農ビジネス学科の 12 ゼミが、ゼミ単位で参戦しました。

多人多脚走とは、二人三脚の大人数バージョンで、各ゼミから 7 名選出され行われました。スタートからゴールまでのタイムで勝負しますが、協力・配慮し合うチームワークが前提です。私たち戴ゼミは練習では上手くできて余裕で勝てると思っていたのですが、本番では転んでしまい、最下位に終わってしまいました…やっぱり本番って何があるかわからないものですね。残念(涙)。

そして、多人多脚走の順位をもとにソフトバレーボールで対戦する組み合わせが決められました。ソフトバレーボールは 4 人ローテーション制で 1 セット 20 分の勝ち残り戦で行われました。私たちは多人多脚走の最下位の悔しさをバネに、ソフトバレーボールのトーナメント戦で勝ち上がり、決勝戦にまで進み、その熾烈な戦いで優勝できました!最後まであきらめずに頑張った甲斐があったなと思います。

普段あまり関わる機会のない先輩と仲良くなれたことや、学科で話したことの無い人とたくさん話すことができたので、素敵な思い出になりました。

(1 年生・北村琉偉)



【食ビゼミ対抗スポーツ交流戦の参加者】

Volleyball



Tenka Tottaro



Wan Paku



Con Saru



Tori Kumu



WWOOF から始まる “これから”

9月1日から7日の約一週間、WWOOFという取り組みを利用して兵庫県丹波市の橋本有機農園の下で勉強しました。

WWOOF (World Wide Opportunities on Organic Farms) とは、有機農業に関する国際的な取り組みです。労働力を提供するかわりに、食事と寝泊まりする場所を提供してもらいます。これにより、無料で農家の下に泊まり込みで勉強することができます。また、ここでの生活は基本的に英語であり、参加者は多国籍です。実際、私もシンガポール人、フランス人と共に過ごしました。ちょっとした語学留学の性格も持ち合わせていると思います。

草刈りから種付け、餌やり、収穫、etc. . . とにかくたくさん仕事を体験しました。外国人と寝食を共にし、拙い英語でたくさん話しました。農家とたくさん話し、たくさん質問しました。それらから、日帰りの体験では学べないであろう農家のリアルな苦勞、気持ちや哲学、英語が使えることでのあらゆる可能性、現場を自分の身で経験する意義、などなど、たくさん学びました。その中でも私にとっての一番の成果は、「自分が何を知らないか、そしてこれから何を学ぶべきか」を知れたことであると思います。それにより、その後の勉強に明確な方針と目的を持って取り組んでいる実感があります。

私には入学前から抱いていた漠然とした目標があり、それが段々と具体性を帯びてきています。その実現のためには、知識、技術、経験が必要であると考えます。一つずつ積み重ねた先の自分がどこまで目標に近づけているか、心底楽しみです。

(1年生・田澤耕太)



【WWOOF で知り合った方々と】



WWOOF

World Wide Opportunities on Organic Farms

とは、有機農業に関する国際的な取り組み

基礎ゼミ・映像コンクール優勝

まずどのような作品にするかと話し合う前に、自分たちはやる気を高めるために、メンバー全員が作品を作るからには基礎ゼミの12グループの中で1位を取ろうと意気込みを決め、作成作業に取り組みました。紹介場所として、自分たちは学校のリラックスできる場所に集中しました。入学して約4か月間で自分たちが思う学校に滞在中にリラックスができる場所をお互いに言い合い、そしてその場所に実際に足を運び、共有しました。作品として残すのだから、リラックスできる場所をただ単に発表するのではなく、自分たちもリラックスできると思える場所を発表したかったので、実際ひとつひとつ挙げられた場所に足を運び実証していくのは大変な作業でしたが、メンバーとのたわいもない会話をしたり、学校から見られる綺麗な景色だったり、作業中苦勞を忘れるような事の方が多くあったので、楽しく仲良くリラックスして作品作業に取り組みました。結果も目標通りに1位を取る事ができ、グループワークの良さを改めて感じられました。

(1年生・五枝瑠亜)

絶対実現!

農学部食農ビジネス学科2年濱口侑己です。私は大学1年だった頃まで勉強を疎かな状態にし、常日頃、授業が終われば、バイトや遊びの日々を続けていました。しかし、2年になり、ある外部講師からの教えによって行動力が化け物のように生まれ変わりました。その先生が言った言葉は、「悩むなら、行動しろ」でした。名言かのように思い、私はその言葉に感銘を受け、悩んだことはすべて一度実践してみようと決断しました。それから約半年が立って今に至りますが、現在は、学生のうちに一店舗場所を一日お借りして飲食店を経営しようと考えおり、そのために、水産物であったり、経営の仕方であったり、学部授業を通して勉学に励みつつ、アルバイトで将来の個人経営のための資金のための資金を集めるために日々、労働しています。

さらに、今まで手にとらなかった書籍まで購入し、熟読してインプットする等といった独学に励んでいます。ちなみに読んでいる本は、飲食店を経営するのに必要不可欠な接客ルールなどが大半です。今後も毎日、この非日常の行動を続けていき、日常にし、飲食店で自営業することを実現させます。

(2年生・濱口侑己)

久米島での研究

私は現在、沖縄県の環境課題である赤土流出問題の研究を行っている。今季の夏季休業期間は研究のフィールドである沖縄県の久米島町に滞在することができた。本研究を勧め、支えてくださっている環境農学研究室の田中先生、島で研究することを歓迎し協力いただいた多くの方々に感謝したい。

今回の滞在は2週間程であったが「島を知る」という当初の目的以上の経験をする事ができたと思う。自然と共に生きる人々の暮らし方、島の歴史、文化など、久米島の奥深さにますます魅せられた滞在であった。

特に印象に残っているのは、研究の拠点としてお世話になっていた久米島ホテル館という施設で行われているナイトツアーで、電気をつけず蛍の光だけで夜を過ごしたことだ。全ての光を消した際に、目が暗さになれていくのを感じると同時に耳や匂いにとっても敏感になった。加えてその日が満月であったこともあり、月の光だけで周囲が満遍なく、そして優しく照らされている光景が目には焼き付いている。明かりをつけるのが当たり前で光の中で一日中暮らすのではなく「本当の夜」を知ったことが唯一無二の体験だった。今回の研究では「人も自然も」という大きなテーマを念頭に置いているが、この体験は人と自然との調和を実現したいという思いをより強いものにした。

(3年生・柚木沙都)

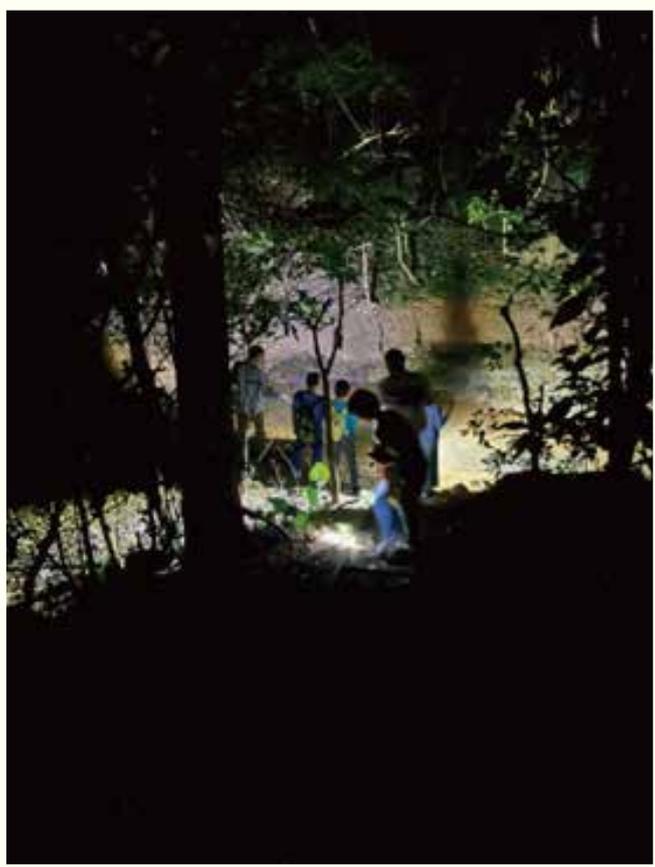
休学のすすめ(?)

農学部一期生の上村です。私は今大学を休学しています。休学を決めた理由を簡単に述べますと、滋賀県で百姓として生活したくて、そのために一年全国の農家さんの下で勉強しようとおもい休学をしました。よく農家さんは百姓とは「100の仕事ができる(なんでもできる)」と説明してくれます。まさにその通りで、私たち都会人・若い人にはできないことを軽々やっつけてくれます。また一人一人が異なる・多面的な顔を持っており接していておもしろく非常に尊敬しています。

そして私は今年の2月までは休学したい、しようとも思っていなかったのですが、正直休学中に何をするとか無計画のまま休学してしまいました。とりあえずお米と山菜に興味があり、かつ移住先の環境と似ている地域に行こうと思い富山県(米農家)に行きました。そこで地域おこし協力隊の人に出会い協力隊に興味を持ちました。その次に山形(米農家)に行きました。5人の協力隊員に出会い、様々な苦悩があると同時にさらに興味を持ちました。また人として尊敬できる社長にも会うことができました。その次に福岡(養蜂)に行きました。蜜蜂の攻撃に耐えながらも、最後には蜜蜂に愛着を感じる事ができました。次に愛媛(キャベツ、玉ねぎ)に行きました。富山と山形で出会った人に僕より年下、同世代の社員さんが多い農業法人だと詳細を教えてもらい、なぜ農業の道に進んだのか気になり聞きに行きました。経営について学ぶべきことが多かったです。次に北海道(かぼちゃ、キャベツ)に行きました。2年前にお世話になった社長達に会いに行くと同時に、狩猟について勉強しようと思い訪ねました。やはり人として尊敬できるやり手社長でした。10月からは群馬(ライスセンター)にて幻のお米を扱う作業を行う予定です。

軸さえ決めておけば無計画であればあるほど、おもしろいことに次の予定が決まるなど無計画だからこそ時間の融通が効くので行き当たりばったりも今のところはおもしろいと思っています。私は休学して正解だと思っています、残り半月何をするのか予想できないので非常にワクワクしています。最後に休学すると本当の意味で自由なので全て自分次第ですが、一年・半月使ってなにかしたいからまだ就職したくないまでのポジティブ・ネガティブな理由関係なしに少しでも悩んでいるなら休学おすすめします。めっちゃ楽しいですよ!

(4年生/休学中・上村慧)



【ナイトツアーでホテル探し】



教員の日常



Watch

365日24時間営業

食ビ通信編集長の田中先生から、単身赴任者の生活について書くように指示がありましたが、あまり内情を明かしてしまうと授業に支障を来すおそれもあるので、別のことを書くことにします。

摂南大学に赴任する前の職場に勤務していた数十年間は、仕事上の問合せへの対応や海外とのやり取りの必要性などから、いつでもすぐにレスポンスできる態勢で日々過ごしていました。もちろん24時間不眠不休でいられるはずはありませんが、適宜仮眠をとりながら、午前0時から午前5時までは必ず起きていました。曜日にかかわらず朝でも夜中でもメールが来ると直ぐに返信していると、「いつ寝ているの」と聞かれることもしばしばで、その都度、冗談で「365日24時間営業ですから」と答えていました。

さすがに、すっかり年も取り、単身赴任で健康上の問題もあるので、摂南大学への着任を機に、365日24時間営業の看板を下ろそうと思っていました……。3年半が過ぎましたが、以前とほとんど変わらない生活が続いています。「明日できることは今日するな」というわけにはいかず、つつい「今日できることは明日に延ばすな」「Never put off till tomorrow what you can do today」という気持ちになってしまいます。

なんて言いながら、睡眠時間を確保して適当にやっていますので、ご安心ください。できる限り365日24時間営業で対応します。

(教員・吉井邦恒)

日曜日を待ち望む日常

「教務や研究以外の日常生活」というお題をいただきましたが、勝手ながら「休日の過ごし方」に読みかえました。まとまった休暇もありたいが、普段でいえば日曜日が大好きで、いつもキリスト教会に行って過ごしています。

教会で何をしているかというと、まず、讃美歌を大声で歌います。歌うことが好きでも普段はなかなか大声を出して歌う機会がないので、日曜礼拝の讃美歌を全力で歌います。お金のかかるスタジオもカラオケも行く必要がなく、しかもピアノやギターなどの生伴奏付きで、なんと贅沢な！そして、共に聖書を読み、牧師による聖書の解き明かしを聴き、感想を語り合います。ご存知でしたか？聖書は、人類史上の最大

のベストセラー、過去数千年にわたって読み継がれてきた世界的なベストセラーです。世界一発行されている本としてギネスにも登録されています。こんなすごい本の存在を知ってしまった以上、いったい何を書かれているかが気になりませんか？！もう読まないのがすまない（なんか人生が不完全のように感じる）ので、教会に来るみんなと一緒に楽しく読んでいます。

さらに、互いに励まし、祈り合います。なんと、この世の中で、親類以外にも、自分のために心から祈ってくれている人がいると知ると、ものすごく励まされて元気が出ますね。私も、自分のことばかり考えてないで、もっと隣人のために祈り励ましたくなります。

こんな素敵な日曜日が必ず訪れることを確信し、毎日楽しみにして過ごすことが、私の日常なのです。あなたにもオススメです！

(教員・戴容秦思)

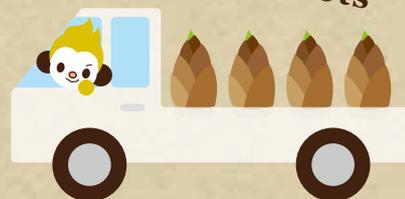
休日の農産物直売所めぐり

以前にも食ビ通信に書きましたが、私の癒しは、やはり、休日の「農産物直売所めぐり」です。四季折々に、旬の野菜・果物を求めて農産物直売所を訪れることは、我が家にとっては食を楽しむ一環であり、四季を感じる機会でもあります。どうしても欲しい旬の農産物を求めて、数カ所の農産物直売所を梯子することもありますが、それも休日の楽しみ・癒しとなっています。また、訪れた農産物直売所で見つけた珍しい野菜が、大変美味しかった時などは、物凄く得をした気分になって、嬉しくなるのです。

さて、皆さんに紹介したい直売所があります。それは摂大枚方キャンパス近く、山手幹線沿いの若宮八幡宮入口で、春先の短い期間のみ開店する「美濃山たけのこ直売所」です。今年、偶然、この直売所の最終日に訪れることが出来て、所謂「白子筍」を大変安価に購入できました。そして、初めて筍が甘いということを知ったのです。あの味を知ってしまったので、来年も買いに行かなければなりません。皆さんも是非とも訪れてみてください。

(教員・浦出俊和)

Bamboo shoots





おすすめの1冊

『ジョブ型雇用社会とは何か—正社員体制の矛盾と転機』

濱口桂一郎、岩波新書、1,020円＋税

この本のタイトル「ジョブ型雇用社会とは何か」という問いに皆さんは答えることができるだろうか。政府が打ち出している経済対策の柱のひとつが「新しい資本主義の加速」で、その目玉が労働市場改革だ。「年功給から日本に合った職務給中心のシステム」への見直しと「労働移動の円滑化」がうたわれている。政府が目指しているのが「ジョブ型雇用社会」で、大企業の一部ではこれに向けた改革がすでに始まっている。現在の雇用体制は「メンバーシップ型」だが、おおむね大企業に限られ、中小企業の多くや非正規雇用は「ジョブ型」が大勢を占めているので、これに近づくとと言える。ただし、社会のシステムを根底から変えるものなので単純な話ではない。在学中の大学生が就職する時にはまだ大きな変化は起きていないだろうが、就職の10年後、足元がゆらぐ状況に直面する可能性は小さくない。

(教員・柳村俊介)

『2040年の日本』

野口悠紀雄、幻冬舎新書(2023年2月第4刷)、980円

学生たちの姿は恐ろしいほど私が学生時代を過ごした90年代から変わっていない。単位さえとればよく、バイトやサークルに精を出す。友達に学生証を預けて授業をさぼる。授業に出る時は教室の後方に座り、机に突っ伏して寝たり、内職をしたりして講義を聴かずに過ごす。試験勉強は一夜漬けで、試験が終わると多くを忘れる。もちろん全員ではないが、少なくとも数の学生がこの調子である。ところが、この間、経済は大きく変化した。この30年間で、日本の一人当たりGDPはアメリカの半分にも満たなくなり、台湾に追い越され、韓国にもまもなく追い越されようとしている。デジタル分野で乗り遅れた日本の経済成長は見通しが暗く、そこへ今後、超高齢化社会が追い打ちをかけるように富を浸食していく。AIによる自動翻訳技術の発展により言葉の壁がなくなれば、日本の雇用は高度な専門性を身につけた海外のデジタル移民に奪われるかもしれない。皆さんは、大学で一生懸命に勉強した海外の若者たちとの競争に打ち勝つことができるだろうか。本書では2040年の日本について、経済、労働、技術といった側面から丁寧に解説されている。本書を一読し、想定するリスクや機会の所在とその大きさを知り、今何をすべきか、考えてみることをお勧めしたい。

(教員・谷口葉子)

食ビ・フォトギャラリー



【在来ミニブタと野生イノシシの交配種(イノブタ)】

ベトナム中部フエ市近郊の山村で少数民族の人びとと新しい生業をつくる実証研究をしています。沖縄のアグー豚に似た在来ミニブタ、野生鶏と普通の鶏との交配種、アカシア林やゴム園の下草を食べるヤギなどを飼養しています。この春から、在来ミニブタと野生イノシシの交配種(イノブタ)を飼い始めました。地域の特産品になりつつあります。

(教員・田中樹)

編集後記

先生方や学生諸君の協力により食ビ通信 No.8 を発行することが出来ました。多忙な時間をやりくりして原稿を書いてくださった皆様に感謝します。今後は、もっと多くの学生諸君の記事があふれるものにしたいなあと願っています。

さて、今回の編集後記は少し真面目な話題というか提案。それは、「あいさつ(会釈)をしよう」です。学内の廊下を歩いていて気になるのは、すれ違う時の挨拶がないこと。これは、教員に敬意を示せとかいう話ではなく、社会では当たり前の作法。着任前に、摂南大学の薬学部を訪問する機会があり、その時に、学生らが笑顔で会釈をしてくれたのが印象に残っています。思わず、「いい雰囲気な大学だなあ」と思いました。大学には外部からの訪問者が頻りに訪れます。就職のリクルートで来訪している方々もいらっしゃるかも知れないし。軽く会釈をするだけで、雰囲気や大学への印象が変わります。何よりも、自分自身の心境に変化が現れるはず。まあ、騙されたと思って始めてみてください。

(編集チーフ・田中樹)